筑紫女学園大学リポジト

Categorical Approach — Metaphor, Metonymy, Simile and Synecdoche

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-02-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 緒方, 隆文, OGATA, Takafumi メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/207

メタファー・シミリ・メトニミー・シネクドキ

緒　方　隆　文

Categorical Approach — Metaphor, Metonymy, Simile and Synecdoche

Takafumi OGATA

1．はじめに

本稿は標題の４つの比喩表現（以下、４表現）を、カテゴリーの観点から統一的な分析を試みる。結論から述べれば、４表現はすべて２つのプロセスを共有する。一つは同一化プロセスで、カテゴリーラベル同士、カテゴリーラベルと成員、カテゴリーの成員同士を同一視するプロセスを持つ。もう一つは焦点推移で、同一視したもので、よりprominent な方に焦点が推移する。喩えるとは、まず何かと何かを同一視し、表現をずらす（焦点推移）と考える。同じと見なす目立つ方に表現をずらす、これが４表現の本質と言える。

この２つのプロセスはカテゴリーをもとに起こる。メトニミーとシネクドキにおいては１つのカテゴリーで、メタファーとシミリでは２つ以上のカテゴリーにおいて、上記２つのプロセスが関わる。４表現は強くカテゴリーと結びついており、カテゴリーが感じられなければ比喩自体が成立しないと考える。

従来は、メタファーは類似性（similarity）の観点で、写像を通して分析されることが多かったが、死んだメタファーの扱いも含め、不備がいくつか指摘されてきている（cf. Grady 1997）。またメトニミーは近接性（contiguity）の観点で分析されてきたが、メタファーとメトニミーの相互作用によるメタフトニミー（metaphtonymy）が出され、両者の明確な区分けがあやうくなっている（cf. Goossens 1995）。シネクドキにいたってはメトニミーとの関係で、ときに曖昧となり、メトニミーの一部とみなされることも多々あった。本稿ではカテゴリーの数によってこれらを明確に再分類し、死んだメタファーも含めて考察し、各表現の特徴を明らかにしたい。

以下２節でカテゴリーと焦点推移について本稿の立場をまず述べ、３節でメトニミー、４節で

シネクドキ、６節でメタファーとシミリについて考察する。５節ではメトニミーとシネクドキの新しい分類を提示し、７節で重なり(overlapping)について検討する。

２．カテゴリーと置き換え(焦点推移)

本稿では４表現には、２つのプロセスが必要と考えている。同一化プロセスと焦点推移である。同一化プロセスとは、似ているもの／近いもの(本稿では一括してカテゴリーを通して考える)を主観的に同一と見なすプロセスである。一方焦点推移とは、よりprominent な要素に焦点が推移することを意味する。いわば参照点構造、あるいはその一種と考えられる。カテゴリーを通してこの２つのプロセスを見ていくので、まずカテゴリーについて２．１節で、次に焦点推移について２．２節で本稿の立場を簡略に述べる。

２．１ カテゴリーについて

カテゴリーとは、他と区別するための境界をもった集合体のことをさす[*1]。本稿ではカテゴリーは広く認知されたカテゴリーに限らず、その場限りの一時的なものも含めて、単に他との境界を持つ集合体とみなしていく。そのためカテゴリーはかなり広い幅をもつ。具体的に言えばカテゴリーは、フレーム的なものから個体的なものへと連続する。フレーム的とは、フレームも含め、カテゴリーラベルに関連するものの集まりを指す。そのため成員同士、ひいては成員とカテゴリーラベルの結びつきは比較的弱い。一方個体的なものとは、通例個体と見なされるが、その中に成員を主観的に見て取るためにカテゴリーと見なされるものになる。もともと個体と見なされるものであることから、カテゴリーラベル(全体)と成員(部分や属性)の結びつきは極めて強く、両者は切り離せないことが多い。そのためこのようなカテゴリーを、通例のカテゴリーと区別して個体カテゴリー (individual category)と呼び、ind cat と表していく[*2]。

さらには一時的な集合も、時にはカテゴリーと見なしていく。一時的であるがゆえに、カテゴリーラベルがはっきりしないものも当然ある。そうしたものは安定していないために、似たもの／近いものへと安定を求めて置き換えがおこる。未知なるもの／はじめて出会うものを理解するときに比喩表現が使われるのはそうした理由から来ると考えられる。元になるカテゴリーまたは成員は、認知度が高いものである必要はないと考える[*3]。

２．２ 置き換え(焦点推移)

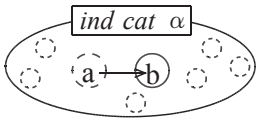
置き換えから焦点推移を考えていく。４つの比喩表現は、何かを別のものに置き換えて表現する方法といえる。メタファー／シミリであれば別の種類の似ているものと置き換え、メトニミーであれば何らかの近いものと置き換え、シネクドキであれば類と種で置き換える。確かに４表現で置き換えは重要ではある。しかし置き換え自体は、比喩表現に特有なものではなく、一般的に見られる操作である。

２つ例をあげたい。１つめは同じ学校に勤める夫婦がいたとする。妻は夫を呼ぶとき、職場では先生、子供の前ではお父さん、実家に帰ればさとしさん、二人のときはあなたと呼びかけを変

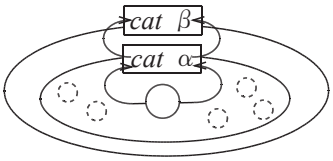
える。呼び名の置き換えである。２つめは宝くじに当たったら何を買うかと聞かれ、シトロエンDS３と答えたとしよう。相手が分からないため「車、車、外車、フランス車」と言い換えて説明する。言い換えによる置き換えである。しかしこれらは、比喩ではない。図示すると(1)になる。(1a)は前者の例で、カテゴリー内の成員間で置き換えが起こっている。夫は通例は個体ではあるが、ここでは成員(状況に応じた呼び名)をもつため２．１節で述べたようにカテゴリーと見なしている。

一方(1b)は後者の例で、成員からカテゴリーラベル、カテゴリーラベルからさらに上位のカテゴリーラベルへの置き換えになる*4。これらが比喩でないのは、もう一つのプロセス、同一化プロセスがないからである。外車＝車でもなければ、車＝シトロエンDS３でもない。(1a)では一見、さとし＝先生と思うかもしれないがそうではない。「さとし」という呼び方と、「先生」という呼び方が同じと認識されていない。別物なので、呼びかえている。よって４表現に必要な同一化のプロセスがないために、比喩にならないと考えられる。

(1)a.



b.

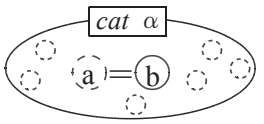


しかしこれらは置き換えと言うより、焦点が推移するだけである。何らかの状況／条件において、一番 prominent な要素に焦点があたっているにすぎない。このとき、本来指し示すものと別のもの(同一と見なす、より prominent なもの)に、焦点が推移するので焦点推移と呼ぶ。このような焦点推移は一般的な操作であり、４表現に固有なものでは全くない。しかし４表現にとって、この焦点推移は必要条件である。ただし十分条件ではないため、さらにカテゴリーにおける同一化プロセス(identification process)が必要と本稿では考える。見方を変えれば焦点推移は、一番 salient なものを手がかりにすることから参照点構造の一種と考えられる。以下、具体的に４表現を見ていくこととする。

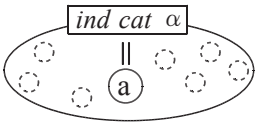
３．メトニミー

メトニミーは従来、近接性でとらえられてきた。近いものに表現を置き換えるとみなされてきた。しかし本稿では、同一カテゴリーで次の２種類の場合に近いと考える。一つは２つのものが同一カテゴリーの成員である場合、もう一つは２つのものがカテゴリーラベルと成員の関係にある場合に近いと考える。そして２つのものが極めて近いと見なされた時、同一化が起こる。２つのものが同じと見なされることで、表現の置き換えが初めて可能となる。この置き換えを本稿では焦点推移と呼んでいる。(2a)は成員同士で同一化(例は (3))、(2b)はカテゴリーラベルと成員で同一化が起こり(例は (4))、よりprominent な要素に焦点が推移する。(2a)は空間／場所の隣接性によるトポニミーで、(2b)は全体と部分の間でおこるパートニミーのメトニミーになる(cf. 山梨 1995)。

(2) a.



b.



(3) ドンブリ(料理)、赤帽、白バイ(警官)、シェイクスピア(本)、SONY(製品)など

(4) 長髪(の人)、黒板を消す、テレビを消す、など

しかしなぜ焦点推移が起こるのであろうか。まず(2a)では、成員 a よりも成員 b の方が、他カテゴリーとの区別に有効だからである。カテゴリーは、他と区別するための境界をもった集合体である。そのため他と区別できなければならないし、区別しやすい方がよい。成員 b が、カテゴリーの中で一番区別しやすい成員になっており、いわば一番 prominent になっている。そのため成員 b に焦点推移がおこると考えられる。

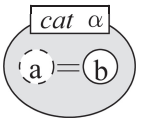
一方(2b)は一見シネクドキ(類と種の間で焦点推移)と似ている。どちらもカテゴリーラベルと成員の間での焦点推移になるからである。しかし大きな違いとして、不可分性がある。(2b)のカテゴリーラベルは ind cat と表記しているように、通例個体と見なされるものである。(2b)では全体と部分が一体化しており、互いは切り離せない。切り離せないと見ることで、カテゴリーラベルと成員の同一視が可能となり、成員またはラベルへの焦点推移が可能となる。

(2b)においてカテゴリーラベルと成員で焦点推移が起こることにも理由がある。まずカテゴリーラベルから成員へと焦点推移がおこる場合、成員に移行することで、カテゴリーラベルの特徴・機能を浮かび上がらせる働きをしている。例えば「手が足りない」は、何か作業をするとき一番 prominent な成員が［手］である。そのため不可分の成員［手］に焦点を推移させることで、カテゴリーラベルの［人］を表すとともに、作業の担い手が必要だという機能的な情報を伝達する。一方成員からカテゴリーラベルへと焦点推移が起こる場合、ラベルに移行することで、個体化(成員が緊密に結びついていること)を強調することができる。すなわち部分を含みつつ、それが一つであることを強調する。例えば「日本はアメリカに戦争で負けた」では、日本政府または日本軍が戦争で負けたのであるが全体を表す「日本」に置き換えられている(アメリカも同様)。また(2b)タイプのメトニミーでは、シネクドキと違い、推移する先または元となる成員が固定しておらず、状況に応じて変わることもある。

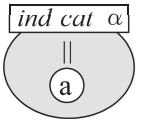
またメトニミーには(6)のような慣用表現がある。結びついた２つ以外が背景化され、いわば表現が自動化している。結びつきが固定化しているので焦点推移のプロセスが感じられず、比喩らしさがない(図は (5))[*5]。

(6) 鍋料理、きつねうどん／そば、中ジョッキ、手を貸す、など

(5) a.



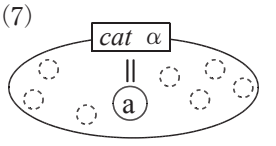
b.



４．シネクドキ

シネクドキは類と種を入れ替える比喩になる。(7) で言えば、［cat α］が類、［a］が種に相当し、どちらかに焦点推移がおこる。この(7)はメトニミーの(2b)と似ているが、カテゴリーラベルが異

(7)



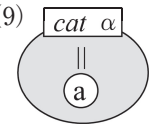
なる。(2b)では成員とカテゴリーラベルが不可分であることを示すために、[ind cat α] であった。しかしシネクドキでは、そうした不可分性はなく、通例のカテゴリーラベル[cat α]になる。

(8) B はおめでただ、不幸があった、A は酒飲みだ、など。(松本 2003：79-81)

メトニミー (2b)では切り離せないことで、同一性が生まれた。では(7)は不可分性がないのに、なぜ同一と見なすことができるのであろうか。シネクドキでは、典型性により同一性が生まれると考えられる。つまり「cat αといえば、成員 a」「成員 a といえば、cat α」という具合に、成員 a は cat αと強い結びつきをもつ典型的な成員である。典型的であることで、両者に同一性が生まれ、置き換え（焦点推移）が可能となる。そのためカテゴリーラベルと成員間の焦点推移は、不可分性か典型性のどちらかによって引き起こされると考えられる。

また成員に焦点推移するか、カテゴリーラベルに焦点推移するかで視点が異なる。例えばラベルへ焦点推移する「花見」のような場合、類が持つ属性(美しい）を表す一番典型的な存在が［成員：種］であることを強調する。一方成員へ焦点推移する「人はパンのみにて生くる者に非ず」のパンは、食べ物または物質的なものの中で典型成員へと推移することで、カテゴリーラベルの属性を強調する。つまり前者は成員に、後者は類の属性に重きをおいた比喩表現になっている。

ここでもまたメトニミーと同様、慣用表現がある。これは成員とラベル以外が背景化され、焦点推移が感じられない。典型性というより固定表現として用いられる。

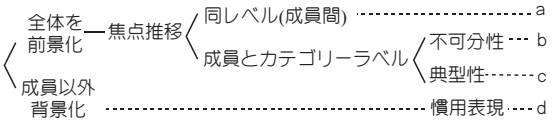
(9) 

(10) 筆箱、下駄箱、鉛筆をおいてください(テスト時)、など

5．メトニミーとシネクドキの解体

成員とカテゴリーラベル間の焦点推移はメトニミーとシネクドキでは異なっており、前者は不可分性、後者は典型性によって同一化が起こると述べた。しかしどちらも一つのカテゴリーにおいて、同一化と焦点推移がおこることは共通している。そのため両者をまとめてSingle Category Figure(Single CF：単一カテゴリー比喩)とし、(11)のような分類に組み替える。

(11) Single Category Figure



(11)ではまずカテゴリー全体が前景化される場合と、成員以外が背景化される場合に分けられる。前者は通例の表現で、後者は慣用表現になる。全体を前景化するものは、さらに焦点推移によって分類される。同レベル間の焦点推移と、成員とカテゴリーラベル間の焦点推移に分けられる。いわば横の焦点推移と、縦の焦点推移に分類される。そして成員とラベル間の推移は、不可分性と典型性によって細分される。従来のメトニミーはa,b,d で、シネクドキはc,d となる。

６．メタファーとシミリ

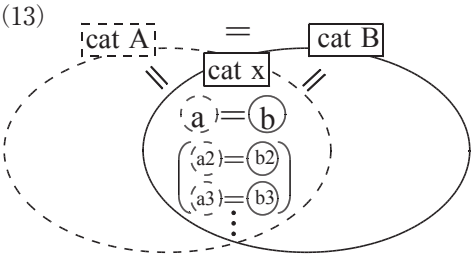
６．１ 同一化と焦点推移

メタファーを考えるとき、(12a)と(12b)ではどちらがよりメタファーらしいだろうか。

(12) a. 彼らはビートルズだ。b. 彼らは日本のビートルズだ。

(12b)の方が比喩として理解しやすいと考えられる。というのも「日本の」がつくことで、ビートルズがカテゴリーとして認識されやすくなるからである。固有名詞は本来カテゴリーとは関係なく独立して存在する。そのため(12a)ではビートルズがカテゴリーと認識されるためには、状況設定が必要となる。メタファーもまたカテゴリーと強く関連している。

(13)



メタファーの場合、Single CF と異なり、２つ以上のカテゴリーが重なり、比喩が成立すると考えていく。図示したものが(13)になる。(13)では２つのカテゴリー (cat A とcat B)が重なっている。２つのカテゴリーの共通する部分がcat x になる。あらましcat A は主意(tenor)に、cat B は媒体(vehicle)に、cat x は根拠(ground)に相当する(cf. Richards 1936：117-120)。「A はB(だ／のようだ)」などと表現される。以降メタファーとシミリは複数カテゴリーを元にした比喩であることから、まとめてPlural Categories Figure(Plural CF：複数カテゴリー比喩)とよぶことにする。

まず同一化から考察する。同一化は Plural CF では一見３種類ある。一つは同一カテゴリーに属する成員同士の同一化になる((13)では cat x に属する成員 a と b の同一化)。成員同士の同一化は、single CF では一組のみであったが、plural CF では複数組の場合もある((13) では a2=b2, a3=b3)。ただし以下話を単純にするため、成員の同一化は一組(成員 a と b)として話を進める。二つめはカテゴリーラベルと成員で同一化がおこる((13) では成員 a と cat A、成員 b と cat B で各々同一化)。これには方向があり、成員がカテゴリーラベルと同じと見なされていく。三つめはカテゴリーラベル同士の同一化になる((13) では cat A と cat B の同一化)。これは成員 a と b が同一化されることによる派生的な同一化になる。

カテゴリーラベル同士の同一化は、成員同士の同一化が引き金になっており、どちらも同じレベルでの同一化である。そのため両者をまとめて、同レベルの同一化(成員同士、カテゴリー同士)とする。そうすると Single CF と Plural CF の両方において、同一化は２種類のみになる。すなわち一つは同レベルの同一化(いわば横の同一化)、もう一つはカテゴリーラベルと成員の同一化(いわば縦の同一化)である。こうすることで同一化の統一した説明が可能となる。

次に焦点推移である。比喩の焦点推移は、同一化があってはじめて可能になる。そのため成員同士、カテゴリーラベルと成員、カテゴリーラベル同士のいずれかで焦点推移がおこる。しかし同一化があれば、必ず焦点推移が起こるわけではない。焦点推移がおこらず、それ自体に焦点が

あたり表現されることもある。また同一化ペアそれ自体に焦点があたらず、表現されないこともある。つまり［焦点推移が起こる／起こらない］に加え、［焦点が当たる／当たらない］の選択肢がある。

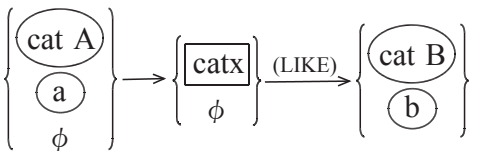
そこでまず焦点推移のパターンを考えよう。焦点推移のパターンには基本２通りある。一つめは成員からカテゴリーラベルへの推移がある。このパターンを縦の焦点推移と呼ぶ。もう一つは同レベルの焦点推移である。成員同士で焦点推移が起こり、カテゴリー間の焦点推移を引き起こす。２カ所で同レベルの推移がおこる。このパターンを横の焦点推移と呼ぶことにする。

６．２　縦の焦点推移

縦の焦点推移は、一方向で［成員からラベルへの焦点推移］のみになる。ただし cat A または cat B の片方だけの焦点推移でもよく、両方で焦点推移が起こる必要はない。とはいえ比喩表現では焦点推移が､少なくとも一つは必要である。ずらして表現するが比喩の本質だからである。そのため表現ではいくつか選択がうまれる。すなわち焦点推移が起こる／起こらないに加え、焦点が当たる／当たらないの選択がある。焦点が当たらなければ表現されない。

具体的には３箇所に選択肢がある(図(14))。まず tenor となる cat A グループに、カテゴリーラベル(cat A)、成員(a)[*6]、焦点なし(φ)の選択肢がある。cat A へ焦点推移があればcat A、なければ成員a、焦点が当たらなければφになる。次に ground となる cat x には、カテゴリーラベル(cat x)と焦点なし(φ)がある。これは推移とは関係がなく、焦点の有無で選択される。最後に vehicle となる cat B グループに、カテゴリーラベル(cat B)と成員(b)がある。焦点推移があれば cat B、なければ成員 b が選択される。ここには焦点なし(φ)の選択肢はない。というのもcat B グループに焦点がなければ、何に喩えたかが分からず、比喩自体が成立しないからである。これらプロセスは基本シミリにも当てはまる。

(14)



ただここで、比喩の表現の仕方を確認する必要がある。比喩の表現の仕方は大きく２種類に分けられる。一つは A IS B. A IS LIKE B. のようなコピュラ表現(A=B)をもとにしたもの、もう一つはそれ以外の表現がある。この２つの表現は、(15)(16)ではコ(コピュラ表現)、別(コピュラ表現以外)と表記されており、○×などでその適否を表現してある。コと別のどちらか一方が適格であれば、比喩として成立するとみなす。本稿ではシミリもメタファーも①～⑧までと考える。(14)の組み合わせとその例を、シミリは(15)、メタファーは(16)に示す。

（15）シミリ

	cat A	cat X	LIKE	cat B	例　　文
①	cat A		LIKE	cat B	コ○　A:さとこはB:バラのようだった。　別○A:さとこにはB:神のようなものがやどっていた。
②	cat A	cat X	LIKE	cat B	コ○　A:さとこはB:バラのようにX:可憐だった. 別○　A:さとこにはB:バラのようなX:可憐さがある。
③	a		LIKE	cat B	コ○　a:昨日の雨と風は、まるでB:嵐のようでした。　別×表現なし
④	a	cat X	LIKE	cat B	コ○　a:昨日の雨と風は、まるでB:嵐のようにX:激しかった。　別×表現なし
⑤		cat X	LIKE	cat B	コ○　B:戦争のようなX:忙しさでした。　別×表現なし
⑥			LIKE	cat B	コ○　まるでB:戦争のようでした。　別×表現なし
⑦	cat A		LIKE	b	コ×　*A:さとこはb:鬼の表情みたいだった。　cf. A:さとこはB:鬼のようだった。
					別○　A:人生にはb:分かれ道のようなものがある。
⑧	cat A	cat X	LIKE	b	コ×　*A:さとこはb:鬼の表情みたいにX:怖かった。
					別○　A:人生にはb:分かれ道のようなX:選択がある。
⑨	a		LIKE	b	コ（比喩でない）　a:そのガラスの硬さはb:鉄板の硬さのようだった。　別×表現なし
⑩	a	cat X	LIKE	b	コ（比喩でない）　a:そのガラスの硬さはb:鉄板の硬さのようにX:頑強だった。　別×表現なし
⑪		cat X	LIKE	b	コ（比喩でない）　b:鉄板の硬さのようにX:頑強だった。　別×表現なし
⑫			LIKE	b	コ（比喩でない）　b:鉄板の硬さのようだった。　別×表現なし

（16）メタファー

	cat A	cat X	LIKE	cat B	例文
①	cat A			cat B	コ○　A:さとこはB:太陽だ。　別○　絵を描くとき、A:彼にはB:神が宿っている。
②	cat A	cat X		cat B	コ○　A:さとこはX:光り輝くB:太陽だ。　別○　A:さとこにはB:バラのX:可憐さがある。
③	a			cat B	コ○　a:さとこの無邪気な笑顔は、まるでB:天使だった。　別×表現なし
④	a	cat X		cat B	コ○　a:さとこの無邪気な笑顔はまさにB:天使でX:愛くるしい。　別×表現なし
⑤		cat X		cat B	コ○　B:戦争のX:忙しさでした。　別×表現なし
⑥				cat B	コ○　B:まるで戦争だった。　別×表現なし
⑦	cat A			b	コ×　*さとこは天使の微笑みだった。
					別○　A:人生にはb:分かれ道がある。
⑧	cat A	cat X		b	コ×　*A:昨日の天候は、X:激しいb:嵐の雨の振り方だった。
					別○　A:人生にはb:分かれ道というX:選択がある。
⑨	a			b	コ（比喩でない）　a:そのガラスの硬さはb:鉄板の硬さだった。　別×表現なし
⑩	a	cat X		b	コ（比喩でない）　a:そのガラスの硬さはb:鉄板の硬さのX:頑強さだった。　別×表現なし
⑪		cat X		b	コ（比喩でない）　b:鉄板の硬さのX:頑強さだった。　別×表現なし
⑫				b	コ（比喩でない）　b:鉄板の硬さだった。　別×表現なし

具体的に見ていきたい。まずメタファーと異なりシミリの場合、LIKE 表現（「のような」等）の表現が必要で、それに必ず焦点があたる。後は(14)の組み合わせになるが、コピュラ表現とそれ以外の表現に分けて考察する。まずコピュラ表現であるが、cat B グループからカテゴリーラベル（cat B）の選択が前提となる。具体的には①～⑥が適格となる。というのもコピュラ表現は媒体（vehicle）に力点を置く表現であり、何に喩えたかが重要な情報になるからである。そのためカテゴリーラベル（cat B）に焦点があたる。一方コピュラ表現以外の場合、cat A グループからカテゴリーラベル（cat A）の選択が前提となる。具体的には①②⑦⑧が適格となる。コピュラ表現以外は主意（tenor）に力点を置く表現であり、何を喩えるかが重要となるからである。そのためcat Aに焦点があたることが前提となる。よってシミリもメタファーも、①～⑧までが適格となる。

一方⑨～⑫までは同一化はあるが焦点推移がない。そのため比喩ではなく、比較と考える。つまりずれがないのである。しかしシミリの⑨⑩は LIKE 表現があるため、ずれがあるかのような感がある。焦点推移がおこったかのような錯覚が起き、比喩であるかのような印象がでる。しかしずれがあれば、比喩になるわけではない。シミリの⑨⑩は比較である。比較は比喩と似ているが、比較は比喩ではない。(17)は比喩であるが、(18)(19)は比較であって比喩と感じられない（例

も含めて山梨 1988:31)。山梨(1988:31)は「直喩としての修辞性がみとめられるためには、なんらかの新しい認識」が必要で、「類似性をこえる意外性や驚きの認識」が関わっていなければならないとする。

(17) a. 父の頭はヤカンのようだ。　　b. 彼女の手は白魚のようだ。

(18) a. 昆虫の羽根は鳥の羽根と似ている。　b. コウモリは鳥に似ている。

(19) a. 飛行機は鳥のようだ。　　b. ウナギはヘビのようだ。

しかし意外性や驚きでは漠然としすぎており、「白魚のような指」など慣用表現においてはそうしたものはない。本稿は単純に、カテゴリーが１つしかないためシミリが成立しないと考える。同一のカテゴリーに属するとみなされるので、似ているのは当然であるが、シミリにはカテゴリーが２つ(違うもの)が必要なのである。「なんらかの新しい認識」とは別のカテゴリーのことなのである。「昆虫の羽」と「鳥の羽」、「コウモリ」と「鳥」は同一カテゴリーに属するとみなされるとき、シミリではあり得なくなるのである。一方メタファーの場合、LIKE 表現がないため、ずれがない。成員(a)と成員(b)は純粋に同じとみなされ、⑨⑩はメタファーとして不適格である。

ただここで注意しなければならないことがある。それは成員同士を比べているつもりでも、それがサブカテゴリーになっており、①や②と同じになっている場合がある。

(20) a. 彼はまるでアメリカ人だ。　　b. 彼の発音は、アメリカ人の発音だ。

c. 彼のth の発音は、アメリカ人のth の発音だ。

例えば英語の発音がネイティブみたいな人がいたとする。(20a)では彼の英語の個々の発音と、アメリカ人の英語の個々の発音が同じと見なされ、「彼」と「アメリカ人」に焦点推移が起こっている。そのため①である。(20b)は一見「彼の発音」「アメリカ人の発音」という二つの成員が同じと見なされる⑨に思える。しかしこれらもまたサブカテゴリーにすぎず、実際は個々の英語の発音が同じと見なされており、発音全般が同じと見なされているわけではない。このように同レベルのものが比較される場合、往々にしてサブカテゴリーと見なされ適格となる場合がある。一方(20c)は「th の発音」という各成員が同一視されている。この場合は、比喩と言うより音声を測る機械みたいなもので一致したかのような感がある。つまり単なる記述であって、そこには「ずれ」が感じられない。

なおシミリとメタファーはただ単に、LIKE 表現があるなしだけの違いではない。その背後に２つのカテゴリーの関係の違いがある。メタファーの場合、とりわけコピュラ表現においては、A=Bと誤解されないような弱い結びつきに限られる。つまり A と B がずれていることが分からなければ比喩にならない。例えば外国人がいて、その人は日本人みたいな生活スタイルとする。見た目が日本人に見える場合、(21a)は比喩かどうか判断に苦しむことになる。一方(21b)は現実世界で「彼」が「ざる」であることはあり得ない。そのためずれが認知され、比喩と分かる。

(21) a. 彼は日本人です。日本食が好きです。　　b. 彼はざるです。どれだけでも飲みます。

一方シミリの場合、こうした制限がない。(21a)でいけば「日本人のような人」と言えば、ずれが明記されているので比喩と分かる。

６．３ 横の焦点推移

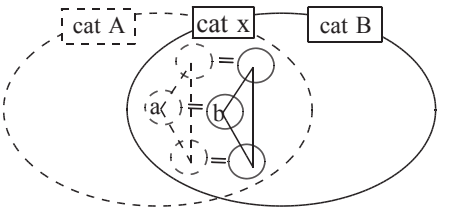
横の焦点推移とは同レベルの焦点推移で、成員レベル(cat x の成員 a から成員 b へ)と、カテゴリーレベル(cat A から cat B)の２つがある。カテゴリーラベルの焦点推移は、成員レベルの焦点推移によって引き起こされる。そのためどちらか片方だけ焦点推移が起こるということはなく、必ず２つのレベルで一緒に焦点推移が起こる。このパターンはことわざや慣用表現に多くの例を見て取ることができる。そのため以下ことわざなどを通して見ていく。まず(22)のような例がある。ここでは横の焦点推移がおこり、カテゴリーラベル cat B と成員 b、それに加え cat x の３つに焦点があたり表現されている。

(22) x:きれいなB:バラにはb:とげがある。(美しい女性が辛辣な言葉を言うのを見て)

ここではまず成員a(辛辣な言葉)と成員 b(とげ)が同一化され、成員 b に焦点が推移する。それにより cat A(女性)と cat B(バラ)が同一化され、cat B に焦点が推移する。それに加えて cat x(美しい)にも焦点があたり、３つが表現されている。

それ以外にフレーム的カテゴリーの場合で、４種類ある。一つめは互いの関係(構造)が同一視される場合である。図示したものが(23)になる。焦点の場所によって(24)のように表現が異なってくる。

(23)



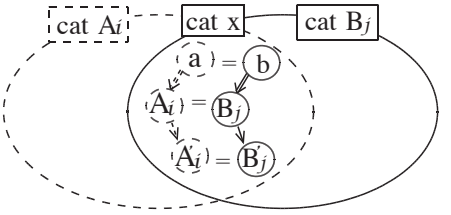
(24) a. 人生(cat A)は旅(cat B)である。

b. 人生(cat A)には、分かれ道(b)がある。

c. 議論(cat A)は建築物(cat B)である。

d. 議論(cat A)には土台(b)が必要である。

(25)

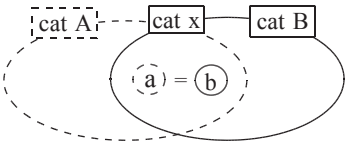


二つめは事態認知をする場合である。事態が同一視され、焦点推移がおこる。図示したものが(25)で、例を(26)に示す。

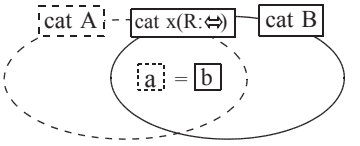
(26)「青菜に塩」「犬も歩けば棒に当たる」「雉も鳴かずば撃たれまい」

(25)は［何か(に／が)何かをする(と、ある状態になる)］が比喩になっている。cat A／B はともにフレーム的で、事態が成員として含まれる。「青菜に塩」を例にとれば、一連のイベント［cat A／B に成員(a／b)が関わるとしなだれる］が同一化され、さらにある人(catA)と青菜(cat B)が同一化される。そして各々横の焦点推移がおこる。カテゴリーラベル(cat B)とイベント内のcat B に同一指標がつき、cat B と成員 b に焦点があたり表現される。

(27)a.



b.

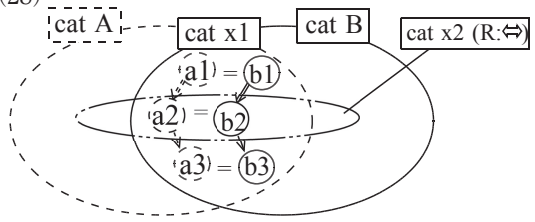


(25)を［行為／変化］と考えれば、［状態］、［関係］に相当するものがある。三つめ［状態］は(27a)、四つめ［関係］は(27b)のようになる。ここでもカテゴリーはすべてフレーム的となる。

まず状態(27a)ではcat A／Bはフレーム的カテゴリーで「場」となり、そこに含まれるもの存在するものが成員として存在する。例えば「絵にかいた餅」では、場としてのcat A(観念・空想)とcat B(絵)が同一化され、そこに含まれる成員a(概念)とb(餅)でも同一化がおこる。そして横の焦点推移により、cat Aと成員aから各々cat Bと成員bに焦点推移がおこる。cat xは［実利がない］というカテゴリーになる。［何かの状況にあるもの］が喩えられている。他に「両手に花」「秋の扇」「両刃の剣」などがある。

次に関係(27b)は［何かと何かの関係］が比喩となっている。cat A／Bの成員は、カテゴリーラベルと何らかの関連があるものである。ここでも横の焦点推移がおこる。例えば「月とすっぽん」では、cat A(ある物／人)とcat B(月)が、そして成員a(別の物／人)と成員b(すっぽん)が各々のレベルで同一化され、cat Aと成員aから各々cat Bと成員bに横の焦点推移が起こっている。cat Xは［ちょっと似ているが全く異なるもの］になる。他には、「提灯に釣鐘」「あばたもえくぼ」「月夜に提灯」などがある。

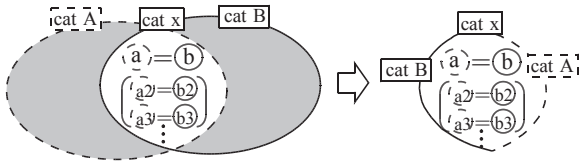
(28)



カテゴリーがフレーム的で、［行為／変化］(25)、［状態］(27a)、［関係］(27b)を表す場合、この３種は時として組み合わさることもある。例えば「西と言えば東と言う」の場合、［Aと言えばその反対Bを言う］という意味での比喩である。cat A(ある発言)とcat B(西)が、a2(反対発言)とb2(東)が同一と見なされ、cat Bと成員bを含む一連のイベントに横の焦点推移が起こっている。この場合、a2とb2には［最初の内容と反対］という別のカテゴリーが重ねられている。このように３分類は、道具の分類であって、互いが重複して用いられることもある。メタファーとは、重ねることでもある。

最後は死んだメタファーと呼ばれるものになる。メタファーと意識されずに、語の字義的意味として定着して使われているものをさす。この場合(29b)のように非共通部分(cat x 以外)がすべて背景化され、cat xのみになったと考えられる。その結果cat Aとcat Bが同じものとなり、カテゴリーが１つになってしまう。そのためメタファーと感じられなくなる。ただ成員(a)から成員(b)、cat Aからcat Bへと横の焦点推移は起こっている。そのため比喩を指摘されれば、カテゴリーが拡張しカテゴリーが２つになるため、比喩であることを感じ取る。メタファーの例を(30)、シミリの例を(31)に示す。

(29) a.　　b.



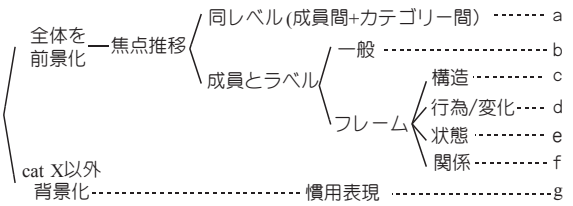
(30) 河口、机の足、先頭、パンの耳、雨足、台風の目、売れ足、など[*7]

(31) 白魚のような指、モミジのような手、赤子が花のように笑う(山梨1988:33)

以上をもとにPlural CFの分類を表に示す((32))。Single CFと同様、前景化が全体か一部分

のみかによってまず分類される。前者は普通の表現で、後者は慣用表現になる。さらに前者はSingle CFと同様、横または縦の焦点推移によって分類される。さらに縦の焦点推移は、フレーム的かどうかで細分類され、フレーム的なものはその機能により［構造］［行為／変化］［状態］［関係］へと４分類される。

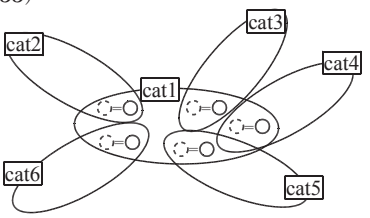
(32) Plural Categories Figure



７．Overlapping

６節で２つのカテゴリーの重なりを見てきた。しかし実際は３つ以上のカテゴリーが重なる場合も多々ある。一つめに２つのカテゴリーが別々に重なる場合がある。図示したものが(33)で、例が(34)になる。(34)は、恋のメタファーの例になる。恋(cat 1)は、物理的力(cat 2)、病人(cat 3)、狂気(cat 4)、魔法(cat 5)、戦争(cat 6)などに喩えられて表現される(Lakoff and Johnson 1980:49)。このときカテゴリー［恋］(cat 1)はその一部を別カテゴリーと交互に重ね合わせる。

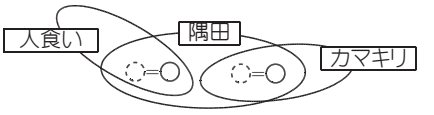
(33)



(34) a. I was *magnetically* drawn to her. (+ cat 2)
b. This is a *sick* relationship. (+ cat 3)
c. I' m *crazy* about her. (+ cat 4)
d. The *magic* is gone. (+ cat 5)
e. He *fled from* her advances. (+ cat 6)

(34)は交互に別々のカテゴリーが重なっているが、同時に重なることもある。例えば芸能人有吉が隅田という芸人につけたあだ名で「人食いカマキリ」というものがある。ここでは［隅田］［人食い］［カマキリ］の３カテゴリーが同時に重なっている((35))。隅田が持っている雰囲気が［人食い］カテゴリーの成員と同一視され、隅田の容姿(ほお骨がせり出している)が［カマキリ］カテゴリーの成員と同一視されている。このとき同一化される成員から、各々 prominent なカテゴリーラベルへと縦の焦点推移が起こり、言語化され結びついたのが「人食いカマキリ」となる。

(35)

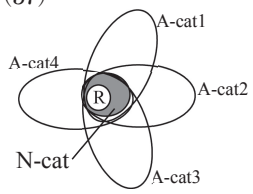


もう一つの重なり方は、３つ以上のカテゴリーが共通部分で重層的に重なる場合がある。こちらの重なりがむしろ一般的といえるが、その一つに形容詞による修飾がある。(33)とは異なり、一部分で積み重なるように重なる(図は(37))。

(36) a. a small round black leather handbag
b. an enormous brown German glass mug

c. a little modern squre brick house（Swan 2005:11）

(37)



(37)では名詞カテゴリー(N-cat)を囲むように、いくつもの形容詞カテゴリー(A-cat)が重層的に重なっている。ただし形容詞の修飾は(37)以外にもいくつかパターンがある[*8] が、詳細な分析は別稿にゆずることとする。

さて問題は(37)のような重なりが、メタファーやシミリに存在するかどうかである。結論からいえば基本ないと考える。メタファーやシミリは２つのカテゴリーの重なりが基本で、３つ以上が重層的に重ならないと考える。むろん(35)のように２つの重なりが、いくつか同時に焦点があたることもあるが、これとて基本２つのカテゴリーの重なりである。一部分が重層的に同時に重なっているわけではない。また形容詞で修飾されていても、それは重層的に重なっているわけではない。例えば(38a)は橋を「危ない」が、(38b)ではバラを「きれいな」が修飾している。どちらも形容詞であることから、(37)のように名詞を形容詞カテゴリーが囲んでいるように一見思える。

(38) a. 危ない橋を渡る。　　b. きれいなバラにはとげがある。

しかし「危ない」「きれいな」は、cat X のラベルにすぎない。カテゴリー cat A とcat B((38a)では［実際にやること］と［橋］、(38b)では［人やもの］と［バラ］)の共通部分が「危ない」「きれいな」という属性(cat X)なのである。メタファーやシミリは別カテゴリを用い焦点推移する表現である。そのため焦点推移する際に、３つ以上あると負荷が大きくなりすぎると考えられる。基本２つのカテゴリーの重なりまでと考える。

なおこのoverlapping（重なり）という操作は、擬人法、アニミズム、ままごと遊び[*9] などから、自分の人生と他人の人生(例えば映画の主人公)を重ねる場合など幅広く使われている。さらには共感覚的なものにも使われている(cf. 岩田 1988)。人間認知の基本的なものと考える。

８．おわりに

本稿は比喩の４表現を Single CF と Plural CF の２つに分類し、どちらも同一化と焦点推移の２つのプロセスが必要と論じた。さらにどちらの比喩においても、縦の焦点推移と横の焦点推移２つが用いられることを示した。また比喩はカテゴリーと強く関連していることを主張した。ここで述べた比喩表現が深く関わるものに、多義性、ニックネームなどがある。これらの分析は紙幅の都合、別稿に譲ることとしたい。

注

＊1　本稿ではカテゴリーの境界は、基本背景化によって定められ、時に収縮拡張がおこると考える。つまりカテゴリーの成員と非成員は明確に区別されておらず、何らかの属性／関係性を中心にまとまった集合体と考える。

＊2　このような集合体は、「［成員］is［カテゴリーラベル］.」のように繋辞で結びつけることができない。(i) a. *屋根は家である。／*腕は太郎である。b. 虎は動物である。／パンは食物である。

＊3　逆に比喩先のカテゴリーがはっきりしなくてもよい。例えば詩がうまい人を褒めちぎっている時に、「君はまさにホメロスだね」と言ったとする。文脈の助けも借りながら、ホメロスが詩人として有名な人物ということが推測され、比喩が成立する。両方のカテゴリーを熟知する必要はない。

＊4　そのため(1b)のような場合、基本カテゴリーへの焦点推移が多くなる。

＊5　(6)のような例は、死んだメタファー (dead metaphor)に対応して、死んだメトニミー (dead metonymy)と考えることができる。

＊6　成員は(13)に示すように、複数の場合もある。

＊7　死んだメタファー (dead metaphor)かどうかは、カテゴリーがcat x の一つしかないと感じられるかどうかにかかっている。また(13)タイプだけでなく、それ以外の(23)(25)(27)においても慣用化が進めば(cat x 以外が背景化されれば)、死んだメタファーとなる。

＊8　形容詞による修飾は基本２種類あり、限定用法は N-cat が外側、A-cat が内側、叙述用法は N-cat が内側、A-cat が外側にくるのが基本となる。しかし実際は変種がいくつかあり、例えば white snow のようにすでにある属性に焦点を当てる場合とか、判断を伴う alleged, known, suspected などの場合はスキーマが異なる(cf. Higginbothan 1985)。これら詳細な分析は別稿に譲ることとする。

＊9　ごっこ遊びにおいても、子供は重なりとそうでないところを認識している。おもちゃの食べ物を実際に食べる子供がいると、「なんでたべるねん。たべられないねんぞ。」と重なりのないところを強調することとなる。cat x 以外の部分の認識もきちんとある。

参考文献

Deignan, A . 2005. *Metaphor and Corpus Linguistics*. Amsterdam: John Benjamins.

Goossens, L. 1995. “Metaphtonymy: the interaction of metaphor and metonymy in figurative expressions for linguistic action,” Goossens, L. et al. (eds.), *By Word of Mouth*. Amsterdam: John Benjamins, pp. 159-174.

Grady, J. 1997. “THEORIES ARE BUILDINGS revisited,” *Cognitive Linguistics* 8, pp. 267-290.

早瀬尚子・堀田優子. 2005.『認知文法の新展開 カテゴリー化と用法基盤モデル』研究社.

Higginbotham, J. 1985. “On Semantics,” *Linguistic Inquiry* 16, pp. 547-593.

岩田純一. 1988.「補稿「比喩ル」の心－比喩の発達の観点から－」山梨正明. 『比喩と理解』東京大学出版会. pp. 161-181.

楠見孝(編). 2007.『メタファー研究の最前線』ひつじ書房.

Lakoff, G., and Johnson, M. 1980. *Metaphors we live by*. Chicago: University of Chicago Press.

松本曜. 2003.『認知意味論』大修館書店.

Richards, I. A. 1936. *The Philosophy of Rhetoric*. New York: Oxford University Press.

佐藤信夫. 1992.『レトリック感覚』講談社学術文庫.

澤田治美(編). 2010.『ひつじ意味論講座 第1巻 語・文と文法カテゴリーの意味』ひつじ書房.

瀬戸賢一. 1995.『空間のレトリック』海鳴社.

————. 1995.『メタファー思考』講談社.

鈴木宏昭. 1996.『類似と思考』共立出版.

Swan, M. 2005. *Practical English Usage,* 3rd edition. Oxford: Oxford University Press.

谷口一美. 2003.『認知意味論の新展開：メタファーとメトニミー』研究社出版.

友澤宏隆. 2009.「限定形容詞による修飾と参照点構造」『言語文化 46』一橋大学. pp. 57-78.

山梨正明. 1995.『認知文法論』ひつじ書房.

————. 1988.『比喩と理解』東京大学出版会.

————. 2000.『認知言語学原理』くろしお出版.

（おがた　たかふみ：英語学科　教授）